徳島市埋蔵文化財調査報告書第11集

# 内ノ御田須恵窯跡発掘調査概報

―1981年度―

1982

徳島市教育委員会

徳島市埋蔵文化財調査報告書第11集

# 内ノ御田須恵窯跡発掘調査概報

—1 9 8 1 年 度—

1982

徳 島 市 教 育 委 員 会

# 序

内ノ御田須恵窯跡は，現状では徳島市内唯一の須恵器を焼成した窯跡であり，従来より多くの須恵器片，丸瓦・平瓦片などが検出され注目されていました。

該地域は，窯場の立地条件に良好であり，土器生産の中心地帯と考えられ，あまり景観はよくない低い丘陵の斜面を利用しており，夏ならむっとくる暑気に，冬ならしんしんと冷えこむ寒気にさらされるような場所に位置している。

本遺跡も，大地形よりも局部的な微地形を重視する立地条件や，北方の入田瓦窯跡などの存在により，該地域においては歴史時代に入っても操業の窯煙は絶えなかったようです。

今回の調査は，開墾などに先立っての事前調査であり，文化財資料の整備の一環として実施したものです。遺構の残存状態があまり良好ではなかったが，古墳時代末期～歴史時代に至る生産遺跡の貴重な資料を獲得することができました。

最後に，調査にあたっての，文化庁の浪貝　毅先生をはじめ地元の研究者の方々のご指導・ご助言とともに地元及び地権者の方々の真摯なご助力に対し深く感謝いたします。

昭和57年３月31日

徳島市教育委員会

教育長　七　條　　力

# 例　　言

1　本書は，昭和56年７月７日から９月29日まで発掘調査を実施した徳島市入田町内ノ御田274に所在する「内ノ御田須恵窯跡」の緊急調査の概要報告である。

2　調査は，国庫補助を受けて，徳島市教育委員会が主体となり，「内ノ御田須恵窯跡発掘調査団」を編成して実施し，事務処理については徳島市教育委員会社会教育課が担当した。

3　検出遺構の実測図については，調査員・調査補助員が分担した。遺物整理については，調査員・調査補助員の協力を得て実施し，遺構・遺物の写真，遺物実測及び製図については一山　典が担当し，一部井上孝志の協力を得た。

4　挿図の第１図については建設省国土地理院発行の２万５千分の１の地形図（徳島・石井図幅）を転載したものである。

5　本書の執筆は，第１章を一山，第２章を大津　衛・井上・一山，第３・４章及び編集を一山が担当した。

# 目　　次

第１章　位置と歴史的環境…… 1

第２章　調 査 の 経 過…… 8

第３章　調査成果の概要……10

　　第 1 号 窯 跡 ……10

　　第 2 号 窯 跡 ……14

第４章　小　　結……15

# 挿　図　目　次


第１図　内ノ御田須恵窯跡と周辺の遺跡 …… 2
第２図　調査地点周辺地形図 …… 9
第３図　内ノ御田須恵窯跡地形測量図 …… 11
第４図　内ノ御田第１号窯跡実測図 …… 12
第５図　内ノ御田第１号窯跡出土須恵器実測図 …… 13
第６図　内ノ御田第２号窯跡出土平瓦拓影図 …… 14


# 図　版　目　次


図版１　内ノ御田須恵窯跡遠景　南東より
　　内ノ御田須恵窯跡遠景　南より
図版２　第１号窯跡調査地点　南東より
　　第２号窯跡調査地点　南より
図版３　第１号窯跡　南より
　　第１号窯跡　北より
図版４　第１号窯跡東西断面　南より
　　第１号窯跡灰原南北断面　東より
図版５　第１号窯跡須恵器出土状態　北より
　　第１号窯跡須恵器出土状態　北より
図版６　第１号窯跡須恵器出土状態　北より
　　第１号窯跡須恵器出土状態　東より
図版７　第１号窯跡灰原須恵器出土状態　南より
　　第１号窯跡灰原須恵器出土状態　南より

# 第1章　位置と歴史的環境

内ノ御田須恵窯跡は徳島市入田町内ノ御田274に所在し，吉野川の支流である鮎喰川によって形成された沖積平野の末端付近の辰ケ山（海抜197.2ｍ）北方の丘陵の南西斜面で海抜50ｍ前後に位置している。辰ケ山山塊と気延山（海抜212.3ｍ）山塊に囲まれたやや開けた谷間に立地している。この立地は，須恵器を生産した窯は景観のよくないところが多く，低い丘陵の中腹や谷間の斜面を利用しており，夏ならむっとくる暑気に，冬ならしんしんと冷えこむ寒気にさらされるような場所に位置しているという一般的な立地条件に合致している。(1)

内ノ御田須恵窯跡の歴史的背景を考える上からも，入田町周辺の平野及び丘陵に存在する歴史時代以前の遺跡について概略的にみておきたい。

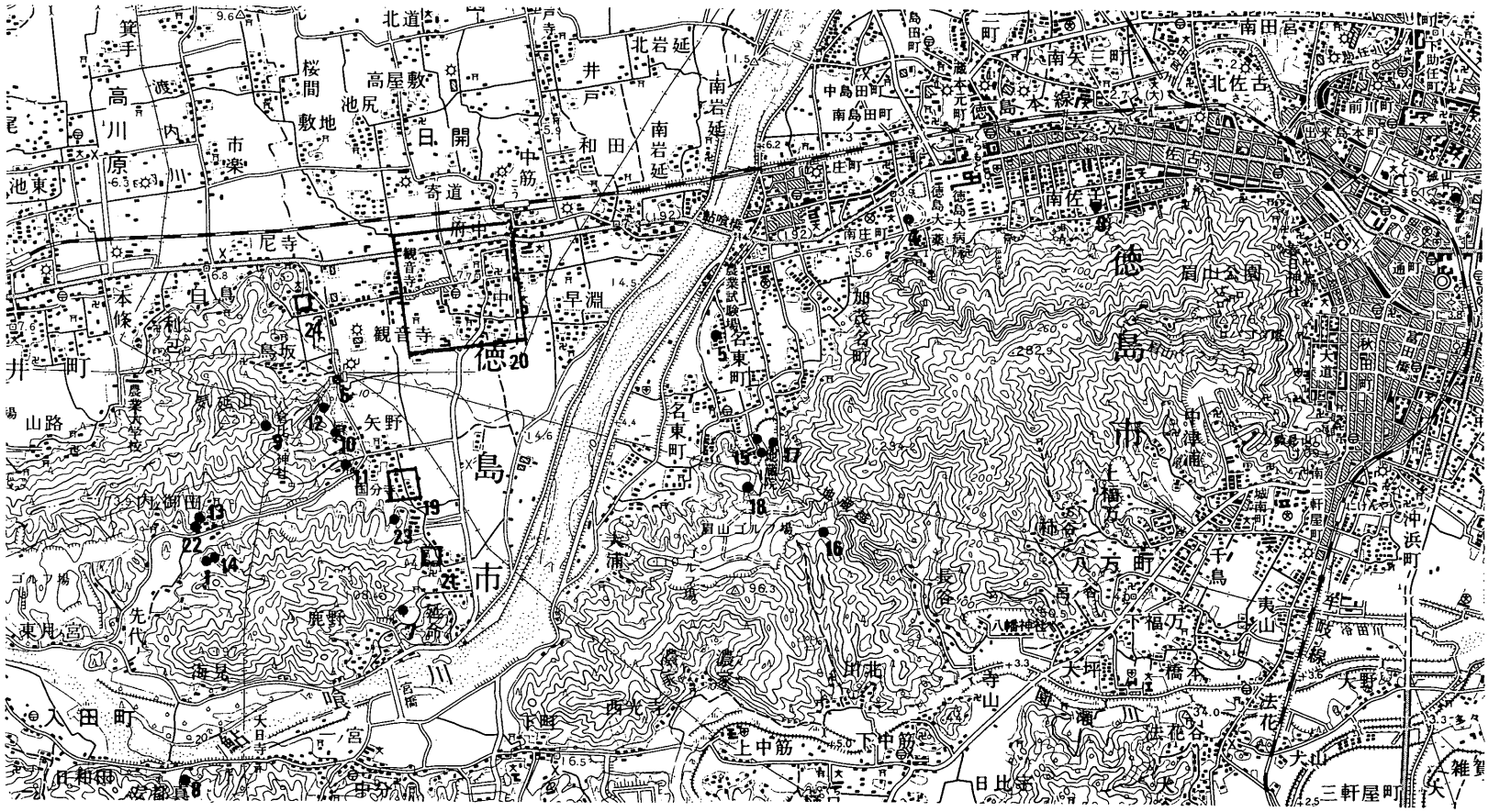
## 1．古墳時代以前

現在までのところ，該地域において縄文時代にまで遡ることができる明瞭な遺跡は発見されておらず，鮎喰川の右岸の南佐古浄水場遺跡より縄文晩期以降の土器片が検出されている程度で，今後の研究の余地が残っている。

弥生時代に入ると，鮎喰川下流域の沖積平野にも遺跡が出現し，鮎喰川西岸の国府町矢野の四国電力国府変電所を中心に，気延山東側すそ野の平野一帯に広がる矢野遺跡（中・後期中心），鮎喰川東岸の名東町１丁目を中心とした沖積低地上に名東遺跡（前期～後期）という二大集落跡が展開している。

矢野遺跡は昭和51年６月からの数次にわたる四国電力国府変電所の工事に伴う緊急調査により，竪穴住居跡，土坑状遺構，溝状遺構，柱穴群等が検出されている。第３次調査（昭和51年度）においては，竪穴住居跡10，土坑状遺構16，溝状遺構２，柱穴群などが検出され，主として弥生時代後期の土器片と若干の須恵器・土師器（溝状遺構より出土），石鏃，打製・磨製石斧，鉄製品，有孔円板型土製品などが出土している。(2)第５次調査（昭和54年度）では竪穴住居跡６，土坑状遺構３，溝状遺構１，壺棺と思われるものなどが検出され，弥生時代中期～後期の弥生式土器片，古墳時代前期の土師器とともに，若干の須恵器片及び打製・磨製石斧，打製石包丁，鉄製品などが出土している。第７次調査（昭和55年度）では竪穴住居跡２，土坑状遺構２，壺棺２などが検出され，弥生時代中期～後期の土器片，若干の須恵器・土師器・瓦片などが出土している。(3)これらの調査成果を考慮してみると，矢野遺跡は弥生時代の中・後期を中心に展開したようである。

名東遺跡は，眉山北西麓のすそ野一帯の沖積低地上に東西約700ｍ，南北約900ｍの広範囲に展開したと思われ，従来の分布調査・試掘調査などにより，弥生時代前期から後期の土器片などが出土している。昭和52・53年度において，市営住宅の建替工事に伴う緊急調査が遺跡の北端部と思われる地点で実施された。(4)第１次調査では竪穴住居跡４，土坑状遺構５，溝状遺構16などが検出され，弥生時代中期・後期の土器片を中心に若干の須恵器，土師器，土錘などが出土している。第２次調査では竪穴住居跡１，溝状遺構１，中世土坑などが検出され，弥生時代後期の土器片が大部分であった。(5)従来の研究成果より考えてみると，本遺跡は古い時期には眉山のすそ野に近い場所で集落を




第1図　内ノ御田須恵窯跡と周辺の遺跡　（縮尺 $\frac{1}{50,000}$）

1 内ノ御田須恵窯跡　2 城山貝塚　3 南佐古浄水場遺跡　4 庄遺跡　5 名東遺跡　6 矢野遺跡
7 源田遺跡　8 安都真遺跡　9 奥谷2号墳　10 奥谷1号墳　11 宮谷古墳　12 矢野古墳
13 内ノ御田1号墳　14 内ノ御田2号墳　15 節句山1・2号墳　16 八人塚古墳　17 穴不動古墳　18 うばのふところ古墳
19 阿波国分寺跡　20 阿波国庁跡　21 常楽寺跡　22 入田瓦窯跡　23 瓦谷瓦窯跡　24 阿波国分尼寺跡

形成し，中期以降に鮎喰川沿いにも進出していったようである。

なお，両遺跡の形成過程については，名東遺跡の場合は，南佐古浄水場遺跡(縄文時代後期以降)[6]→庄遺跡→名東遺跡という変遷過程がたどられるが，矢野遺跡の場合は，このような変遷過程がたどれないことが指摘されている。[7]いずれにしても，これらの大集落を経済基般として，次代の古墳築造のためのエネルギーが蓄積されていったようである。

弥生時代中期以降の重要な遺跡として，農耕祭祀との関連が強いといわれる銅鐸出土地があり，該地域周辺でも，国府町の源田遺跡，入田町の安都真遺跡などがあげられる。

源田遺跡は，内ノ御田須恵窯跡の南東約1.4kmに位置し，四国霊場第16番札所常楽寺南西のため池の西岸の緩斜面に立地している。六区画袈裟襷文銅鐸3個と細形銅剣1口が出土し，1号銅鐸の高さは52cm，2号銅鐸は41.5cm，3号銅鐸は38cmであり，細形銅剣は長さ54.3cm，幅6.15cmを測る。[8]

安都真遺跡は，内ノ御田須恵窯跡の南方約1.4kmに位置し，鮎喰川の南岸の標高約70mの急斜面に立地している。小型の四区画袈裟襷文銅鐸が4個出土し，1号・2号・3号銅鐸はほぼ完全で，それぞれ29.5cm，21.7cm，24.6cmの鐸高である。1号銅鐸は岡山県種松山出土の銅鐸と同鐸銅鐸であり，極めて重要である。[9]

## 2．古　墳　時　代

鮎喰川下流域における古墳時代の平野部の遺跡は，前述の矢野遺跡，名東遺跡などより該時代の遺物が出土している程度であり，古墳時代の集落跡については今後の調査の進展に伴っての研究課題であろう。一方，古墳については平野部に続く丘陵一帯に多数築造されているが，沖積平野上に築造された古墳は皆無となっている。鮎喰川下流域に存在する古墳で，発掘調査等がなされ，その内容・時期等が判明しているものは少なく，大部分の古墳は墳丘の形状，表面採集品や伝承遺物等に依拠しているが，これらの古墳の概要を古墳時代前半期と後半期とに分けて考えてみたい。

### 前半期古墳

最古の古墳と考えられるのは名東町の節句山1・2号墳であり，1号墳は石蓋盤棺で鉄製品(鉇)のみの出土の点などからして，弥生時代の墳墓の可能性が指摘されている。2号墳は箱式石棺に竪穴式石室をしつらえた埋葬施設を有し，棺及び石室内部から舶載の四獣鏡や勾玉，鉄剣，鉄刀子，鉄斧，鉄鎌などが検出されており，3世紀末ないしは4世紀前半に位置づけられている。いずれにしても，節句山1・2号墳が古墳発生を考える上での重要な鍵を握っているように思われる。

次に古く位置づけられるのは，名東町の八人塚古墳であり，徳島県下では数少ない積石塚[10]の前方後円墳（全長約60m）で内部主体は竪穴式石室と考えられ，4世紀前半に位置づけられている。[11]

奥谷1号墳（全長50m）は4世紀後半から5世紀にかけて増加する前方後方墳の形態を示し，埋葬施設は不明であるが，墳丘の形態や立地の点などから，八人塚古墳に後続するものと考えられている。[12]

奥谷2号墳（全長約19m）は積石塚で前方後円墳の形状を示し，内部主体には竪穴式石室2，箱式石棺1があり，竪穴式石室の構造などより4世紀後半の年代が比定されるものと思われる。[13]

また，宮谷古墳（前方後円墳，全長約40m）も同様な指摘がなされている。[14]

**後半期古墳**

鮎喰川流域における丘陵には多数の後半期古墳が存在するが，発掘調査などがなされ，その内容，様相，性格等が判明しているのは１～２例である。従って現状における後半期古墳は，横穴式石室を内部主体とする古墳である。入田町・国府町・名東町を通じて，現在まで横穴式石室を有する前方後円墳は確認されていない。また，小口墳横穴式石室，短小で付随的な羨道部を有する横穴式石室等の古い様相を呈する横穴式石室も確認されていない。

鮎喰川下流域の周辺丘陵で確認されている後半期古墳は気延山東山麓と眉山北西麓の古墳群で，それぞれを気延山古墳群，名東古墳群と呼称している。

気延山古墳群は，ひびき岩古墳群，日枝神社古墳群，内谷古墳群，矢野城跡古墳群，八倉比売神社古墳群等に大別される。現在までに確認されているこれらの古墳群の総数は約80基であるが，過去に破壊・消滅したものや未確認地域を入れると90基以上はあったものと推定される。代表的なものとしては，県指定史跡である矢野古墳（内部主体は横穴式石室）があげられる。本古墳は径15m程度の円墳で南東に開口している。石室は玄室長３.８ｍ，玄室幅２.４ｍ，玄室高２.５ｍ，羨道長4.2ｍを測り，奥壁には巨大な一枚石を使用しており，両袖式の横穴式石室である。

名東古墳群も前述の節句山１・２号墳，八人塚古墳以外は大部分が横穴式石室[15]を内部主体とする後期古墳である。代表的なものとしては，名東町１丁目の地蔵院境内に所在する穴不動古墳があげられる。本古墳は径16ｍの円墳で南東に開口する両袖式の横穴式石室を内部主体としている。玄室長４.３ｍ，玄室幅２.２ｍ，玄室高２.０ｍ，羨道長５.０ｍ，羨道高１.８ｍで矢野古墳と同様に奥壁は一枚石で構築されている。

矢野古墳・穴不動古墳[16]ともに６世紀末から７世紀前半の年代が比定されており，終末期古墳の代表的なものとして重要である。

なお，内ノ御田須恵窯跡の北東約20ｍ離れて，内ノ御田１号墳（内部主体は横穴式石室），北方約300ｍには内ノ御田２号墳（内部主体は横穴式石室），南方約50ｍには内ノ御田３号墳などが所在している。

**歴　史　時[17]　代**

歴史時代に入ると，鮎喰川下流域の左岸一帯を中心に，阿波国分寺跡，阿波国分尼寺跡，阿波国庁跡などが展開する。

阿波国分寺跡は内ノ御田須恵窯跡の東方約１.５㎞に位置し，四国霊場第15番札所を中心に展開している。鮎喰川下流域の沖積平野上に形成され，南方は辰ケ山山塊より派生する丘陵がせまっている。昭和53年度からの３次にわたる発掘調査により，寺域西・南・北限の一部確認，中心伽藍（金堂跡・講堂跡）の一部などが検出され，方２町あるいは方800尺の寺域が推定されている。

阿波国分尼寺跡は阿波国分寺跡の北北西約１．㎞に位置し，名西郡石井町石井字尼寺，法華寺裏[18]と称する水田中の基地を中心に展開している。昭和45・46年度の２度の発掘調査により，金堂・北門・築地・溝などの遺構を検出した。寺域は158ｍ（天平尺１町半）四方で，伽藍中軸線は真北から西へ約11度ふれ，条里地割とほぼ一致していることが確認されている。昭和48年４月に国指定史跡となっている。

阿波国庁跡[19]は阿波国分寺跡の北北東約１.２㎞で徳島市国府町府中の大御和神社を中心に展開した

ものと推定されているが，従来の研究はあまり進展していない。庁域8町四方などが考えられるが，今後の研究課題であろう。なお，昭和56年度の国府中学校建替工事に伴う緊急調査及び分布調査の成果などより，従来の推定地より西方に展開した可能性を有している。

以上のごとく，鮎喰川下流域は原始・古代の阿波の中心地であり，内ノ御田須恵窯跡の北方約250mの山の南斜面にはトンネル状に刳り抜いた地下式有階無段式の登窯である入田瓦窯跡（全長11.7m，県指定史跡）なども営造されている。(20)

（一山　典）

**註**

(1) 田辺昭三「窯跡の分布」『陶邑古窯址群Ⅰ』　1966．4

(2) 徳島県教育委員会「矢野国府変電所遺跡緊急発掘調査概報　第3次調査」『徳島県文化財調査概報　1976年度』　1978．3

(3) 徳島市教育委員会「発掘調査の成果　弥生時代　矢野遺跡（第5次）」『徳島市文化財だより』No.1　1978．9

徳島市教育委員会「矢野遺跡第5次調査概報—1978年度—」『徳島市埋蔵文化財調査報告書』第5集　1979．3

徳島市教育委員会「矢野遺跡」『徳島市の原始・古代—埋蔵文化財資料展—』　1980．11

(4) 秋山　泰「第二編　原始編　第五章　弥生式時代」『徳島県史』第1巻　1964．3

天羽利夫・岡山真知子「第一編　原始・古代の徳島　二　水稲農耕のはじまり」『徳島市史』第一巻　総説編　1973．3

岡本健児「入門講座・弥生土器3・4」『考古学ジャーナル』No.90，93，1974．11．3

天羽利夫・岡山真知子「鮎喰川下流域における弥生文化の展開—序論—」『徳島県博物館紀要』第5集　1974．3

徳島県立城東高等学校郷土研究部考古学研究班「徳島市周辺における考古学的研究」『城東郷土研究』第3号　1974．3

(5) 徳島市教育委員会『名東遺跡第1次調査概報—1977年度—』『徳島市埋蔵文化財調査報告書』第2集　1978．3

一山　典「名東遺跡調査成果の概要」『徳島市史だより』第4号　1978．3

徳島市教育委員会「発掘調査の成果　弥生時代　名東遺跡（第1次）」『徳島市文化財だより』No.1　1978．9

(6) 徳島市教育委員会「名東遺跡第2次調査概報—1978年度—」『徳島市埋蔵文化財調査報告書』第5集　1979．3

(7) 天羽利夫・岡田真知子「第一編　原始・古代の徳島　二　水稲農耕のはじまり」『徳島市史』第一巻　総説編　1973．3

(8) 三木文雄「阿波国源田出土の銅剣銅鐸とその遺跡」『考古学雑誌』第36巻第2号　1950．2

(9) 三木文雄「阿波国安都真出土の銅鐸とその遺跡」『考古学雑誌』第50巻第4号　1965．4

梅原末治『銅鐸の研究』　1927．3

杉原荘介『日本青銅器の研究』　1973．3

(10) 末永雅雄・森　浩一「徳島県徳島市眉山周辺の古墳調査報告」『徳島県文化財調査報告書』第九集　1966．3

(11) 註(10)と同じ

(12) 天羽利夫「阿波忌部の考古学的研究」『徳島県博物館紀要』第9集　1978．3

(13) 徳島市教育委員会「奥谷2号墳」『徳島市の原始・古代―埋蔵文化財資料展―』　1980．11
徳島市教育委員会「奥谷2号墳」『古墳時代の徳島市―埋蔵文化財資料展―』　1981．11
徳島市教育委員会「奥谷2号墳発掘調査概報」『徳島市埋蔵文化財調査報告書』第1集　1982．3

(14) 註(12)と同じ

(15) 天羽利夫「終末期の古墳二基―穴不動古墳・矢野の横穴式古墳」『徳島県博物館報』No.14　1972．3
天羽利夫「徳島県下における横穴式石室の一様相」『徳島県博物館紀要』第4集　1973．3

(16) 註(15)と同じ

(17) 天羽利夫・岡山真知子「第一編　原始・古代の徳島　三　古墳の発生と変遷」『徳島市史』第一巻　総説編　1973．3

(18) 徳島県教育委員会「阿波国分寺跡緊急発掘調査概報―徳島市道改築工事に伴う緊急発掘調査―」『徳島県文化財調査概報　1976年度』　1978．3
徳島市教育委員会「発掘調査の成果　古代　阿波国分寺跡（第1次）」『徳島市文化財だより』No.1　1979．3
徳島市教育委員会「阿波国分寺跡第1次調査概報―1978年度―」『徳島市埋蔵文化財調査報告書』第4集　1979．3
一山　典「阿波国分寺跡第一次調査概要」『徳島市史だより』第5号　1979．3
徳島市教育委員会「発掘調査の成果　阿波国分寺跡第2次調査概要」『徳島市文化財だより』No.4　1980．3
徳島市教育委員会「阿波国分寺跡第2次調査概報―1979年度―」『徳島市埋蔵文化財調査報告書』第7集　1980．3
一山　典「阿波国分寺跡第二次調査概要」『徳島市史だより』第6号　1980．3
徳島市教育委員会「阿波国分寺跡」『徳島市の原始・古代―埋蔵文化財資料展―』　1980．11
徳島市教育委員会「発掘調査の成果　阿波国分寺跡第3次調査概要」『徳島市文化財だより』No.6　1981．3
徳島市教育委員会「阿波国分寺跡第3次調査概報―1980年度―」『徳島市埋蔵文化財調査報告書』第9集　1981．3
一山　典「阿波国分寺跡第三次調査概要」『徳島市史だより』第7号　1981．3
徳島市教育委員会『阿波国分寺跡―出土遺物展―』　1981．11

(19) 徳島県教育委員会・石井町教育委員会『阿波国分寺跡緊急発掘調査概報』　1971．3
徳島県教育委員会・石井町教育委員会『阿波国分寺遺跡(第2次)緊急発掘調査概報』1972．3

田辺征夫「阿波国分尼寺」『仏教芸術』103　1975．9
白木康夫「国分寺・国分尼寺の伽藍配置について（下）」『考古学ジャーナル』No.116　1975．12
一山　典「南海道における国分二寺について」『しぶき』No.65　1978．10
(20) 立花　博・天羽利夫『徳島市内ノ御田瓦窯跡調査概報』1970．3

# 第2章 調 査 の 経 過

徳島市内における現状では唯一の須恵窯である「内ノ御田須恵窯跡」について，開墾などに先立って「文化財資料の整備」の一環として，緊急発掘調査を実施して，その性格究明をはかるとともに，文化財の積極的活用をはかることを目的とした。

調査地区は丘陵の西南斜面に位置し，調査対象面積は約200㎡であり，昭和56年7月7日～9月29日の期間調査を実施した。調査に先立って，「内ノ御田須恵窯跡発掘調査団」を編成した。

調査は2m×2mのグリッド法を基本として，部分的にトレンチ法をも併用して実施した。

**内ノ御田須恵窯跡発掘調査団**

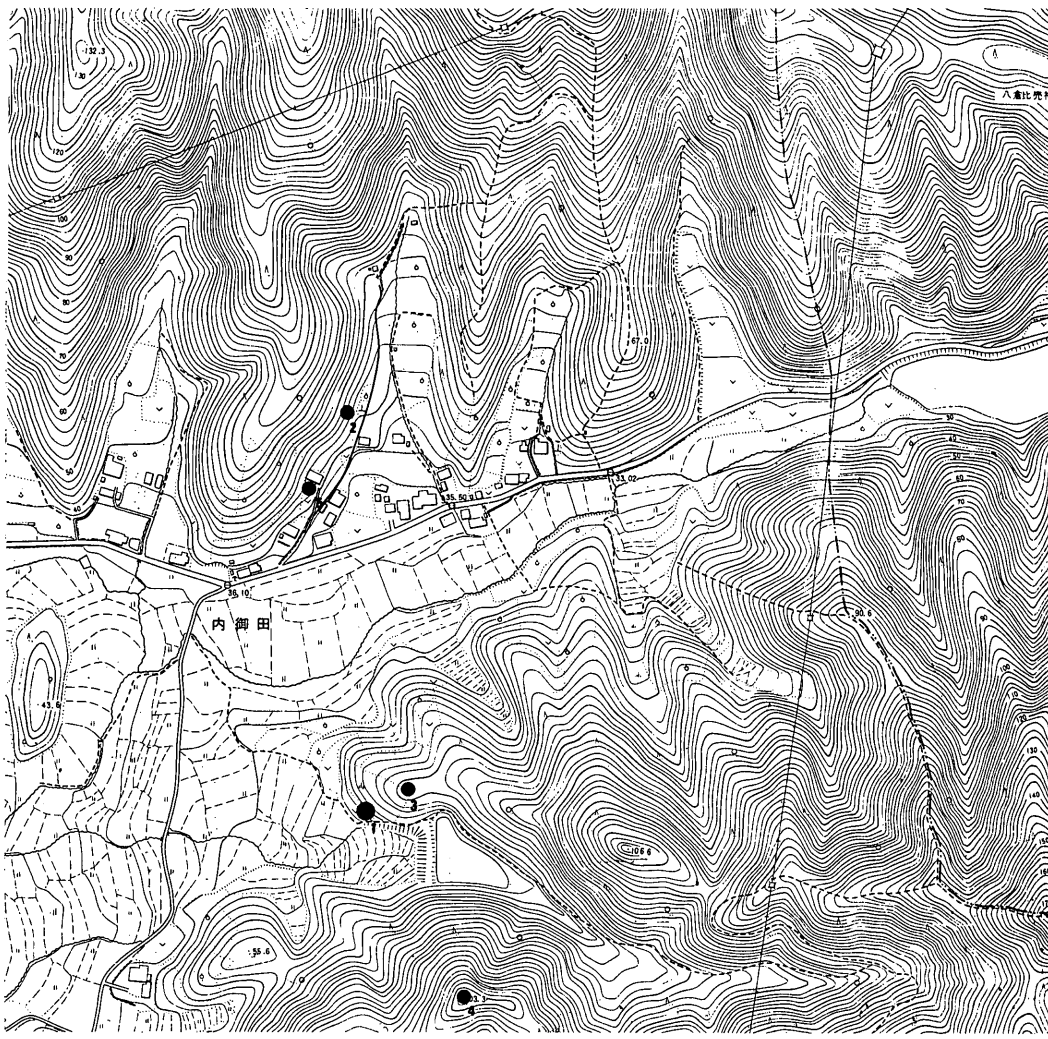
| | | |
|---|---|---|
| 顧　　問 | 田中良平 | （徳島市文化財保護審議会委員長） |
| | 岩崎正夫 | （徳島市文化財保護審議会委員） |
| | 伊丹　功 | （徳島市文化財保護審議会委員） |
| | 川人幸夫 | （徳島県教育委員会文化課長） |
| | 立花　博 | （徳島県教育委員会文化課文化財保護班長） |
| 調査団長 | 七條　力 | （徳島市教育委員会教育長） |
| 調査副団長 | 原田一美 | （徳島市教育委員会社会教育課長） |
| 調査主任 | 一山　典 | （徳島市教育委員会社会教育課主事・日本考古学協会会員） |
| 調　査　員 | 河野幸夫 | （阿波郷土会副会長） |
| | 井上孝志 | （徳島市教育委員会社会教育課事務員） |
| 調査補助員 | 菊谷富男 | （国学院大学ＯＢ） |
| | 谷本耕三 | （芦屋大学教育学部生） |
| | 武知敏子・美馬邦子・森　孝子・矢本アサ子 | |
| | 幸田笑子 | |
| 事務局 | | |
| 局　　長 | 鎌田祐輔 | （徳島市教育委員会社会教育課主幹兼庶務係長） |
| 次　　長 | 大津　衛 | （徳島市教育委員会社会教育課文化振興係長） |
| | 稲垣富美子 | （徳島市教育委員会社会教育課主事） |
| | 切幡保子 | （徳島市教育委員会社会教育課課員） |

指導・助言　天羽利夫・河野雄次・小林勝美・近藤　賢
近藤忠男・島巡賢二・新　孝一・菅原康夫
滝山雄一・多田寿一・松永住美・横田里司
（順不同，敬称略）

調査にあたりましては，文化庁文化財調査官の浪貝　毅氏の現地におけるご指導・ご助言をいただきました。記して感謝の意を表する次第です。

また，地主の黒田親一氏には，調査にあたりまして土地を心よく提供していただくとともに，調査期間中は真摯なご協力をいただきました。記して感謝の意を表する次第です。

（大津　衛・井上孝志）




第２図　内ノ御田須恵窯跡調査地点周辺地形図

1 内ノ御田須恵窯跡　2 内ノ御田１号墳　3 内ノ御田２号墳　4 内ノ御田３号墳　5 八田瓦窯跡

# 第3章　調査成果の概要

## 第　1　号　窯　跡

### 窯の位置と保存度

調査地区の一番東側に位置しており，従来より須恵器片とともに周辺部より軒平瓦・丸瓦・平瓦片などが多数採集されていた地点である。焚口の床面で標高約48m，窯体主軸の方向は —　°— となっている。窯体は若干の砂礫が混在している暗赤褐色土をベースとしている。

窯体は焚口と燃焼部及び焼成部の大部分が開懇などにより上面が削平されている。奥壁および煙り出しは消失し，痕跡も不明確である。このために，窯体残存長は床面の主軸線上で延長約３ｍとなっている。床面傾斜や床面の焼成度合から推定すれば，復原した窯体の全長もやや長くなるものと思われる。

### 窯体各部の構造

燃焼部と焼成部とは，床面の傾斜変換部をさかいに区分することができる。本窯跡では，焚口，傾斜変換部がともに消失しているため実長をはかることは困難である。焼成部は３ｍ前後の延長を有するものと推定される。

燃焼部の床面傾斜は10°前後でゆるやかな傾斜を有している。床面の上面には厚さ20cm前後の炭化物層が存在し，赤褐色を呈している。

側壁は主軸線を中心に左右ほぼ対照と思われる。右側壁は大部分が消失しており，左側壁だけが一部（７cm前後の高さ）残存している。１・２次ベースに対応する壁は地山を掘り込んだままで，最終ベースに対応する側壁は砂礫混在の粘土の貼り壁状を呈している。

焼成部床面残存長はおよそ３ｍである。主軸線から右側は床面及び側壁とも大部分が破壊されてほとんど原形をとどめていない。したがって床幅の実長は不明である。部分的に残存する左側壁及び遺物の出土状態などから推定復原すれば，床幅は２ｍ前後と思われる。

いずれにしても，残存状態が悪く，プランもほとんど復原不可能である。床面は加熱によって，赤褐色を呈する還元層を呈しているが，燃焼部の奥部では還元層が薄く，全体に床面がやわらかくなっている。

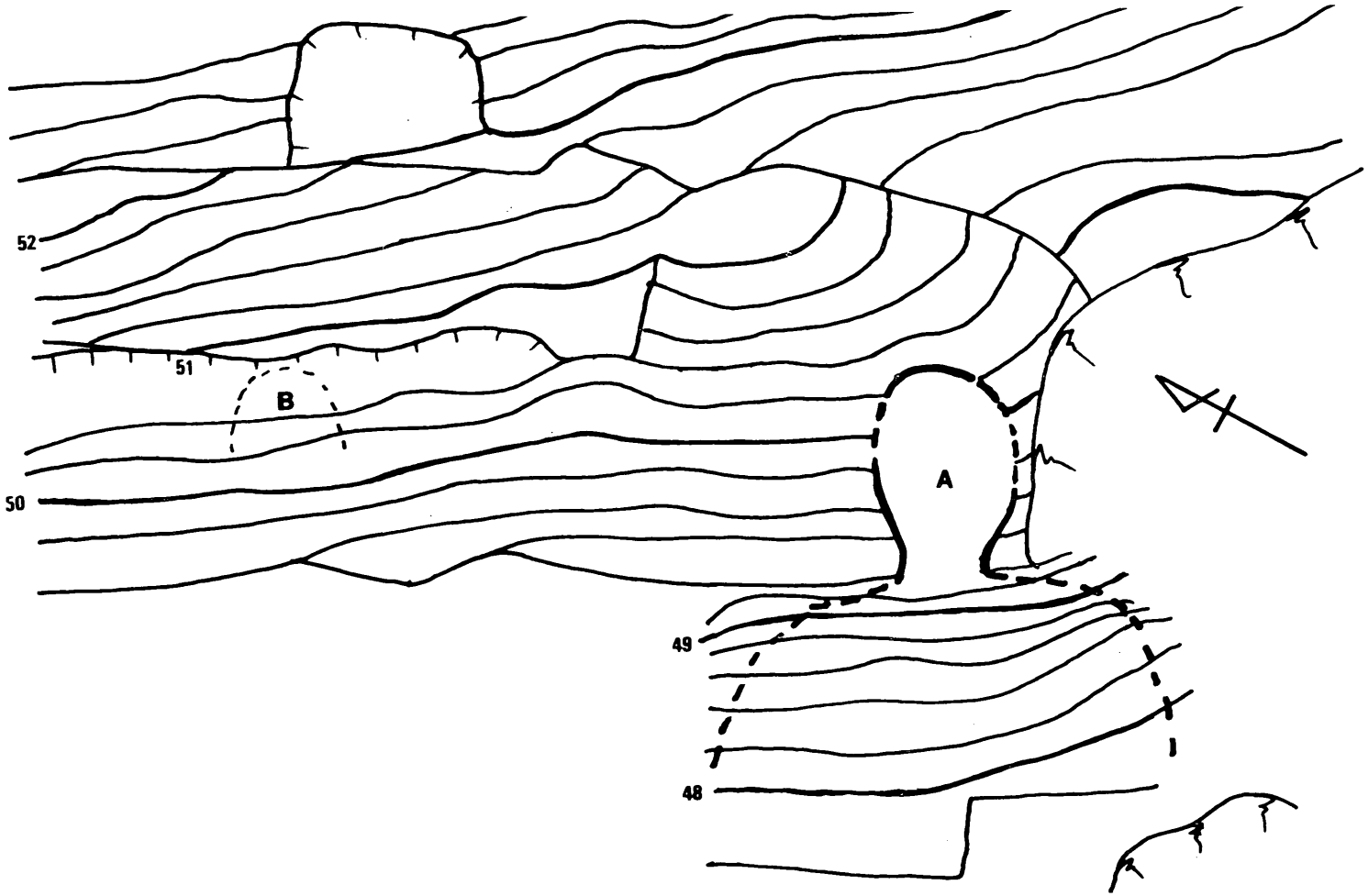
## 灰　　原

灰原は焚口から丘陵斜面の南方（下方）へ扇形ひろがっているものと推定される。炭化物を混在した暗赤褐色土層が最大厚約40cmの堆積が認められた。南側は山道による切断がなされ，西側は開墾による攪乱が極めて顕著である。

## 出　土　遺　物

窯跡本体からは，須恵器の蓋坏の蓋を中心に，蓋坏の身・甕・短頸壺・高坏・提瓶・摺り鉢などが検出され，灰原からは，甕・蓋坏・瓶などが出土している。

甕は２～３種類に大別されるが，出土点数は極少である。窯体の燃焼部付近出土のものには口頸部に波状文を有するものも認められている。




第3図　内ノ御田須恵窯跡地形測量図

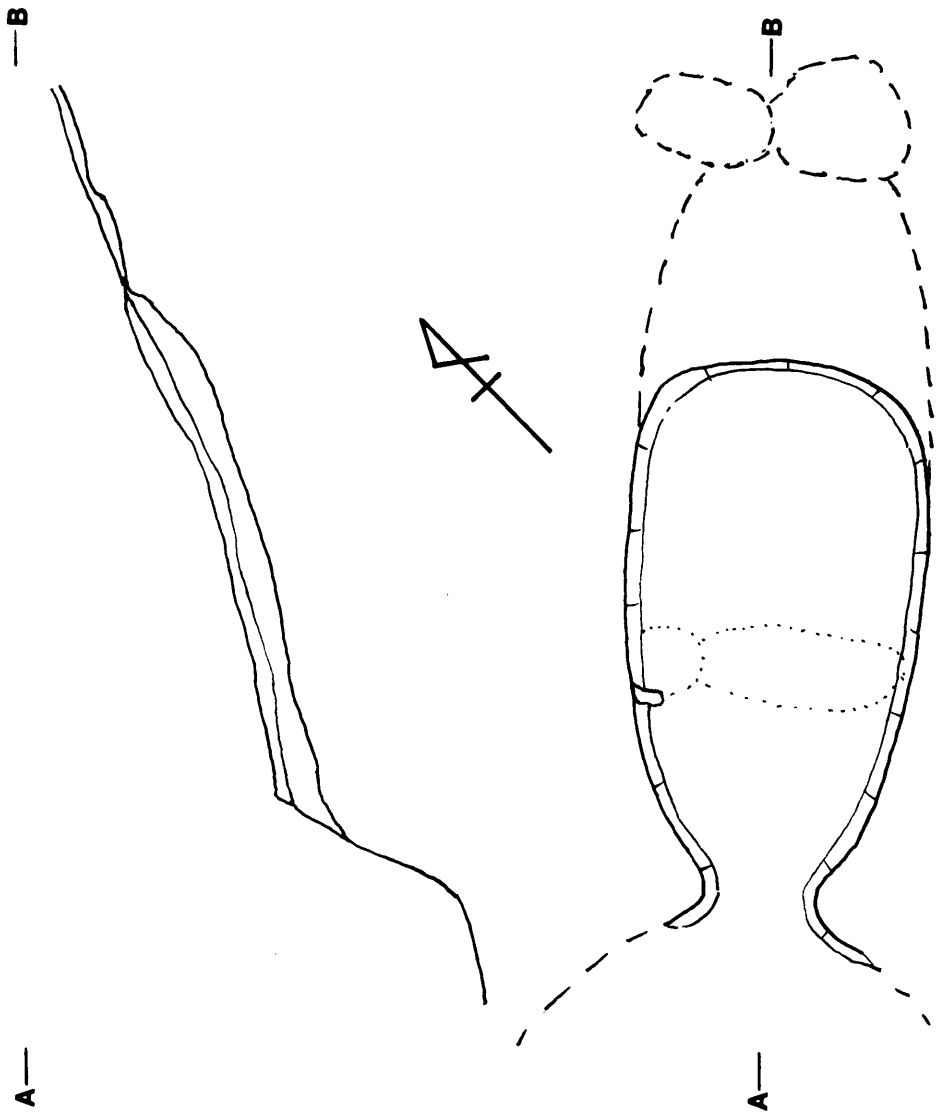
A　第1号窯跡　　B　第2号窯跡

蓋坏は大小数種類に大別され，小型のものには坏身とセットにして焼成したと思われる製品も出土している。蓋に擬宝珠状のつまみのつくものと無蓋のものが出土している。

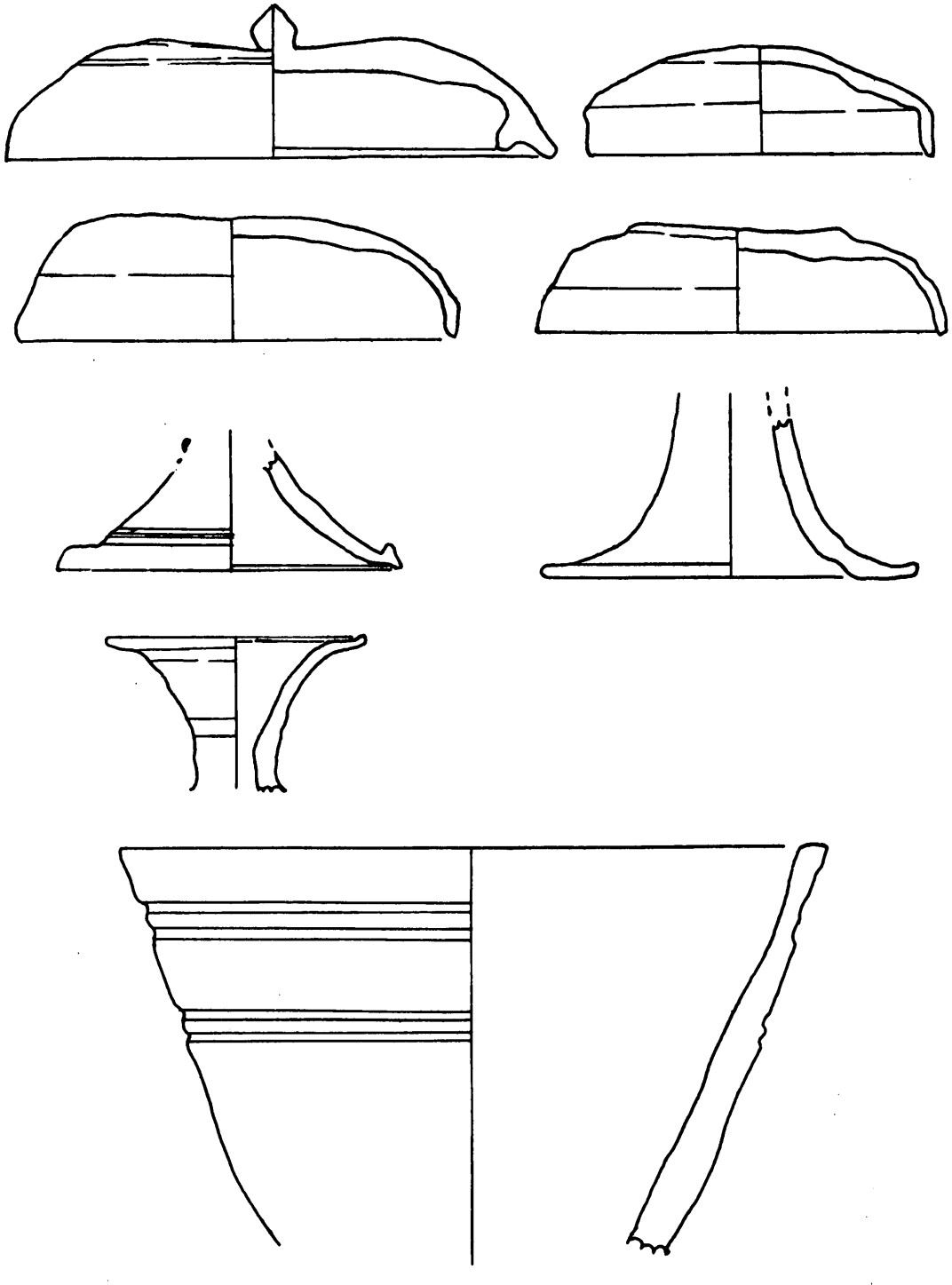
高坏は出土点数は少ないが，脚端部が肥厚するものとほとんど肥厚しないものとが存在するようである。

短頸壺・瑕なども出土点数は１～２点であり，瑕は灰原より１点発見されたのみである。

なお，窯体周辺部より，格子叩目文を有する平瓦片や玉縁を有する丸瓦片なども出土している。また，従来の採集品の中には土錘なども発見されている。




第４図　内ノ御田第１号窯跡実測図



第５図　内ノ御田第１号窯跡出土須恵器実測図　　（縮尺 ½）

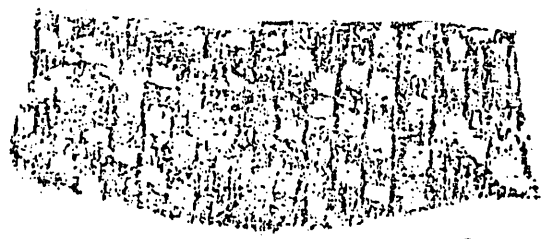
1 蓋坏・蓋　　2 蓋坏・蓋　　3 蓋坏・蓋　　4 蓋坏・蓋

5 高　坏　　6 高　坏　　7 瓮(灰原出土)　　8 すり鉢

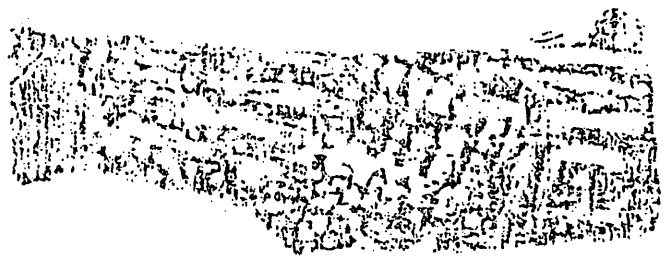
## 第　2　号　窯　跡

第1号窯の西側に焼土・炭化物が検出され，周辺部より丸瓦・平瓦片を中心に若干の須恵器片が出土したが，上面が削平されているため詳細は不明である。瓦窯跡の可能性もあったものと思われる。

1



2



3

第6図　内ノ御田第2号窯跡出土平瓦拓影図　　（縮尺 ½）

1　斜格子叩目文　　2　斜格子叩目文　　3　斜格子叩目文

# 第4章　小　　結

我国で須恵器の生産が最も早く始まったのは，現状では大阪府南部の大阪府南河内郡狭山町から堺市・和泉市・岸和田市を含む，東西約15km，南北約9kmの広大な丘陵地帯に所在する「陶邑古窯址群」が有力であるといわれる。

陶邑古窯址群は標高200mに達しない低い丘陵で，東南が高く，西北が低い泉北丘陵に位置し，須恵器の窯跡は標高40～50mの丘陵の斜面を中心に展開する。窯跡の分布は時期によっていくつかの傾向があり，陶器山・高蔵・富蔵・栂・光明池・大野池・谷山池などの地区にわかれる。この地域での須恵器の生産は5世紀～11世紀にわたり，存続期間は6時期（Ⅰ～Ⅵ）にわけられ，さらに細分化がすすんでいる。

1961年（昭和36年）以来，大阪府教育委員会により泉北丘陵の開発に伴って発掘調査が実施され，古墳などとともに窯跡が約200個所発見されている。

陶邑で須恵器の生産開始後しばらくして，摂津・尾張・伊勢・遠江・出雲・能登などでも須恵器の生産が始まる。該地域を中心として5世紀末から6世紀の初頭にかけて第1の画期と考えられている。初めのころの地方窯は生産の規模も小さく，製品の供給範囲も限定されたものであり，田辺昭三氏によれば，「地方窯が生産を始めて間もないころの須恵器は，その形も器種も同じ時期の陶邑製品に酷似している」との指摘がなされ，生産のための技術者の導入と彼らの地方への移動を推測されている。なお，群集墳の成立は須恵器の生産にも多大な影響を与えたものと考えられている。

第2の画期は6世紀末から7世紀の前半にかけてみられ，北陸・関東から九州にわたる広範な地域に須恵器の生産地が拡大した。この時期になると，先進地域では群集墳が衰退し始め，供献具の需要が低下し，次第に日常的な供膳用什器類が量産化され始める。7世紀前半には盤・皿類のほか，長頸壺・平瓶などの新しい器種が登場し，壺のいくつかと提瓶などは姿を消し，蓋坏は蓋が浅く身が深くなり，前時期のものとは逆転した形を呈し，蓋の頂部には宝珠形のつまみがつけられるようになる。

第3の画期は8世紀初頭であり，律令国家の整備に伴って，官衛・寺院などの需要を受けて窯がつくられた。なお，8世紀になると，濃尾平野の東部一帯では優秀な製陶技術を駆使した灰細陶器が生産され始め，陶邑古窯址群も9世紀以降は急速に衰退し，11世紀に入ると窯煙も絶えてしまったといわれ，地方窯もわずかな命脈をたどったものも次第に廃絶への一途をたどるようである。(1)

以上の研究成果を考慮して，今回の調査について簡単にまとめてみると，

① 窯跡の築造年代は「陶邑」編年のⅡ～Ⅲ型式に比定され，6世紀末～7世紀代と考えられ，約100年間の操業期間と思われる。

② 周辺部の古墳などに副葬されている須恵器に本窯跡出土品の技法と同一のものが認められ，本窯跡より供給された可能性を有している。

・恵解山10号墳出土の須恵器の蓋坏（主として第2次埋葬のもの）

③ 内ノ御田一帯は窯跡の立地条件に良好であり，該地域は土器生産の中心地帯と考えられ，北方の入田瓦窯跡などの存在より，歴史時代に入っても操業の窯煙は絶えなかったようである。(2)

最後に，徳島県内の主要な須恵窯跡についての若干の考察を加えて，結びにかえたい。

現在までのところ，徳島県内において，検出されている須恵窯跡は数個所しか存在しない。

## 徳島県内主要須恵窯跡一覧表

1982．3．31現在

| No. | 名称 | 所在地 | 立地 | 検出遺構 | 出土遺物 | 製作年代 | 参考文献 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 内ノ御田第1号窯跡 | 徳島市入田町内ノ御田274 | A | | 甕・蓋坏・高坏・短頸壺・瑠・提瓶・すり鉢 | 6C末～7C | (3) | |
| 2 | 内ノ御田第2号窯跡 | 同上 | A | | 蓋坏 | 8C後半 | | |
| 3 | 旗見窯跡 | 麻植郡山川町横走195－1204 | A | 半地下式窖窯 | 浅皿・坏・高台付坏・埦蓋・瓶・鉢・壺・甕・土師器 | 8C後半～9C | (3) | |
| 4 | 西池田須恵窯跡 | 阿南市富岡町 | A | | 坏 | 6C後半 | (2) | |

### 註

(1) 田辺昭三『陶邑古窯址群　Ⅰ』　1966．4

中村　浩ほか『陶邑　Ⅰ』『大阪府文化財調査報告書』第28輯　1976．3

(2) 立花　博・天羽利夫『徳島市入田町内ノ御田瓦窯跡調査概報』　1970．3

### 参考文献


(1) 田辺昭三『陶邑古窯址群　Ⅰ』　1966．4

(2) 森　浩一『紀淡・鳴門海峡地帯における考古学調査報告』『同志社大学文学部考古学調査報告』第2冊　1968．9

(3) 森　浩一・辰己和弘「徳島県山川町旗見窯跡調査報告」『同志社大学文学部考古学調査報告』第4冊　1971．11

(4) 中村　浩ほか『陶邑Ⅰ～Ⅲ』『大阪府文化財調査報告書』第28～30輯　1976．3～1978．3

(5) 中村　浩「須恵器生産に関する一試考」『考古学雑誌』第63巻第1号　1977．4

(6) 小田富士雄ほか『北九州市小倉南区　天観寺山窯跡群』　1977．10

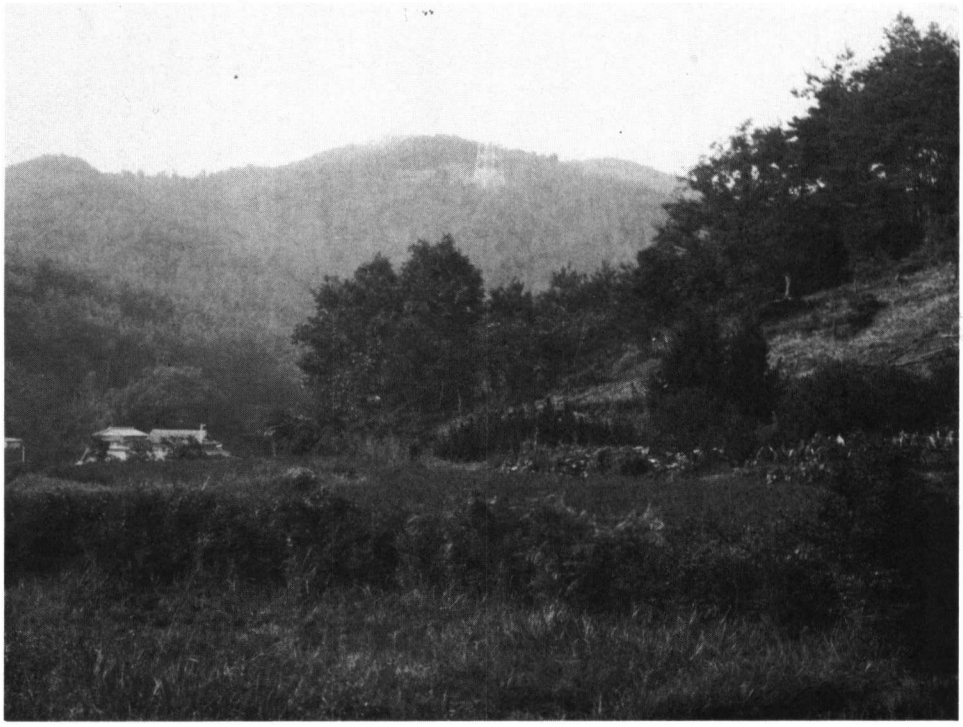
(7) 原口正三『須恵器』『日本の原始美術』　1980．7

(8) 八賀　晋編『須恵器』『日本の美術』No.170　1981．7

(10) 中村　浩『和泉陶邑窯の研究』　1981．9

# 図　　版

図版1

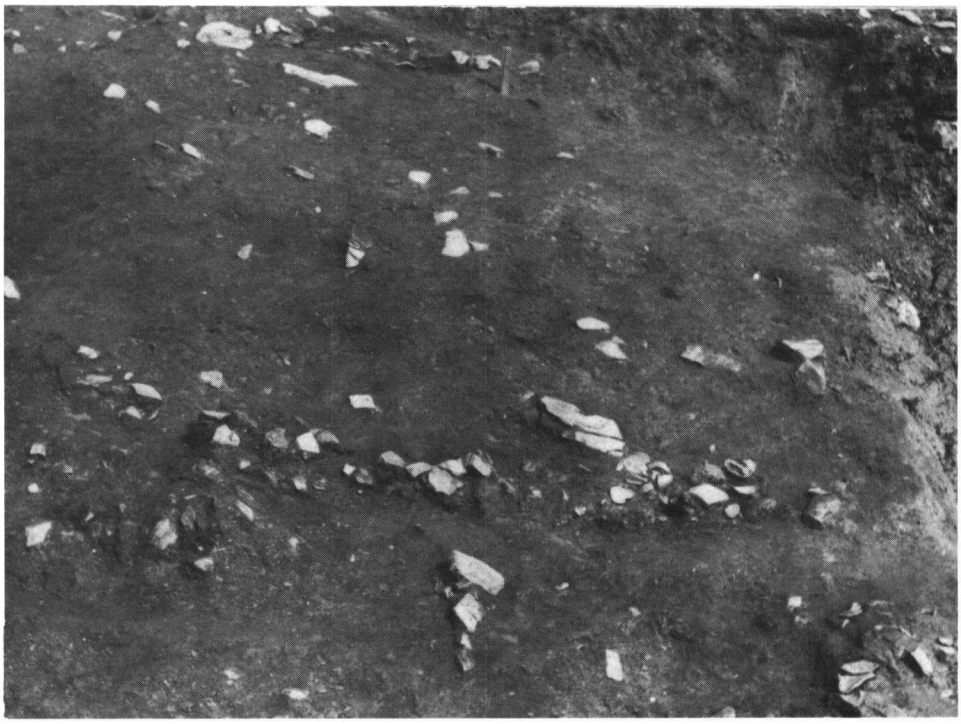


内ノ御田須恵窯跡遠景　　南東より

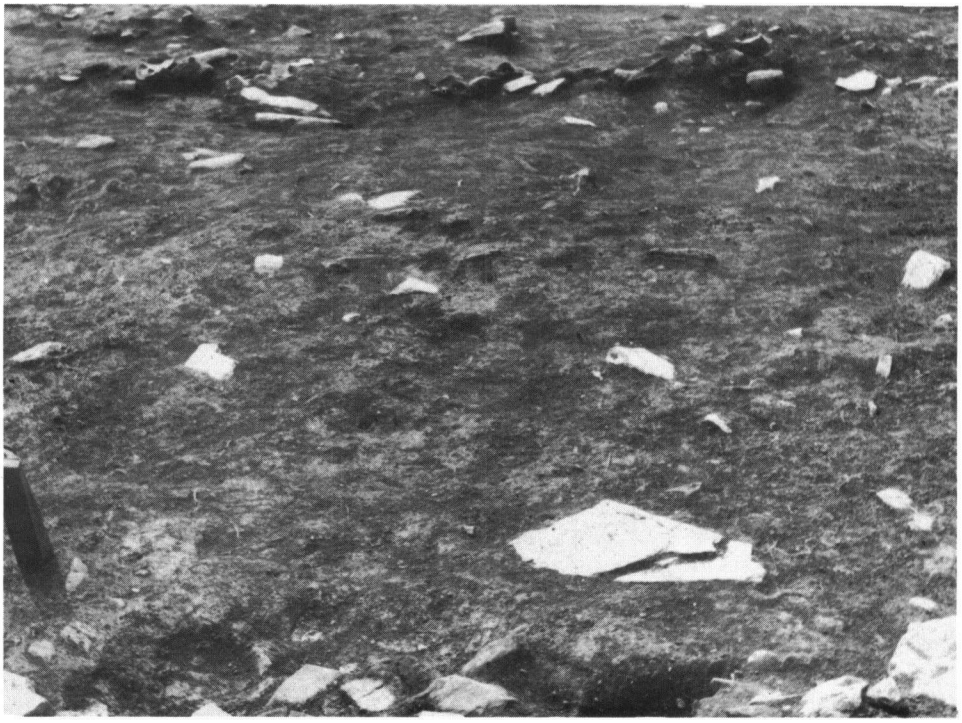
内ノ御田須恵窯跡遠景　　南より

第 1 号 窯 跡 調 査 地 点　　南東より

第 2 号 窯 跡 調 査 地 点　　南より



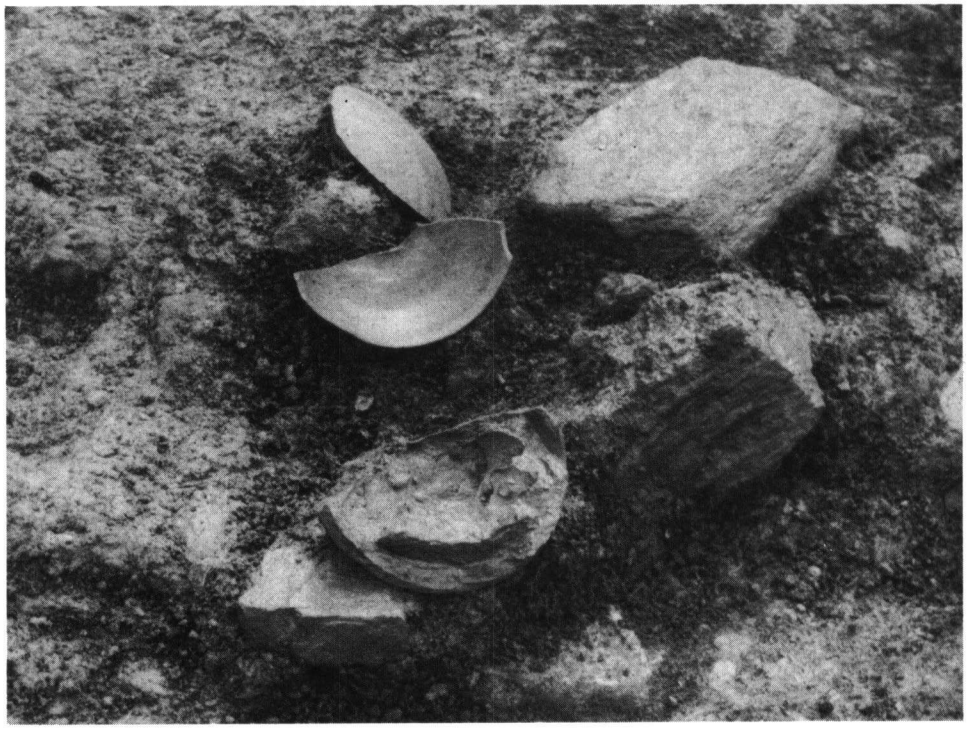
第　1　号　窯　跡　　南より



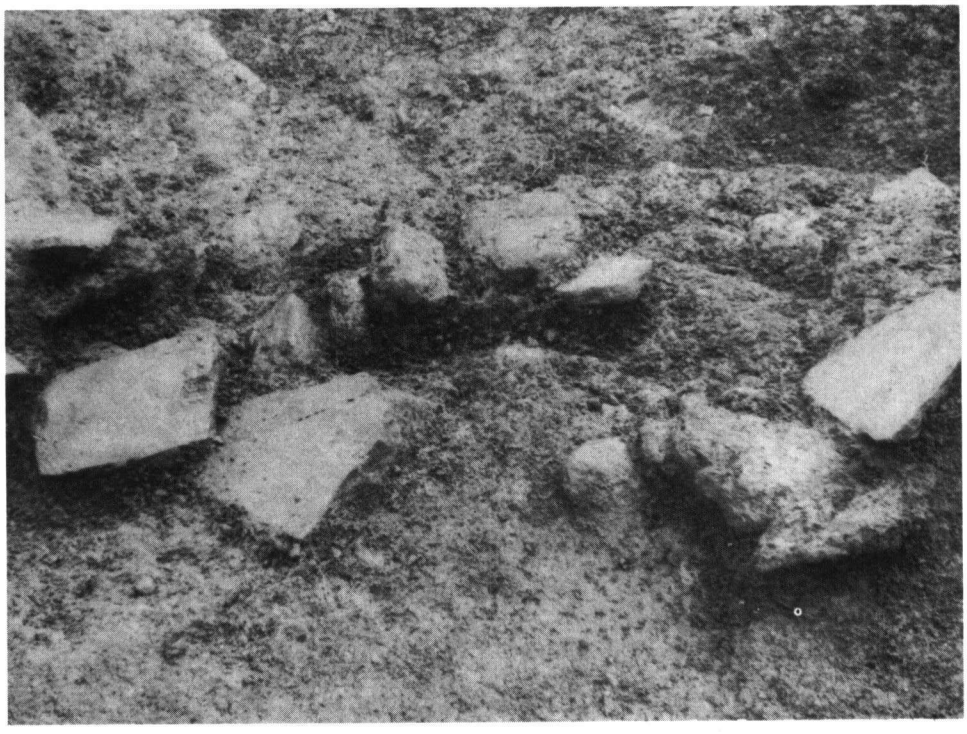
第　1　号　窯　跡　　北より

第 1 号 窯 跡 東 西 断 面　　南より

第 1 号 窯 跡 灰 原 南 北 断 面　　東より



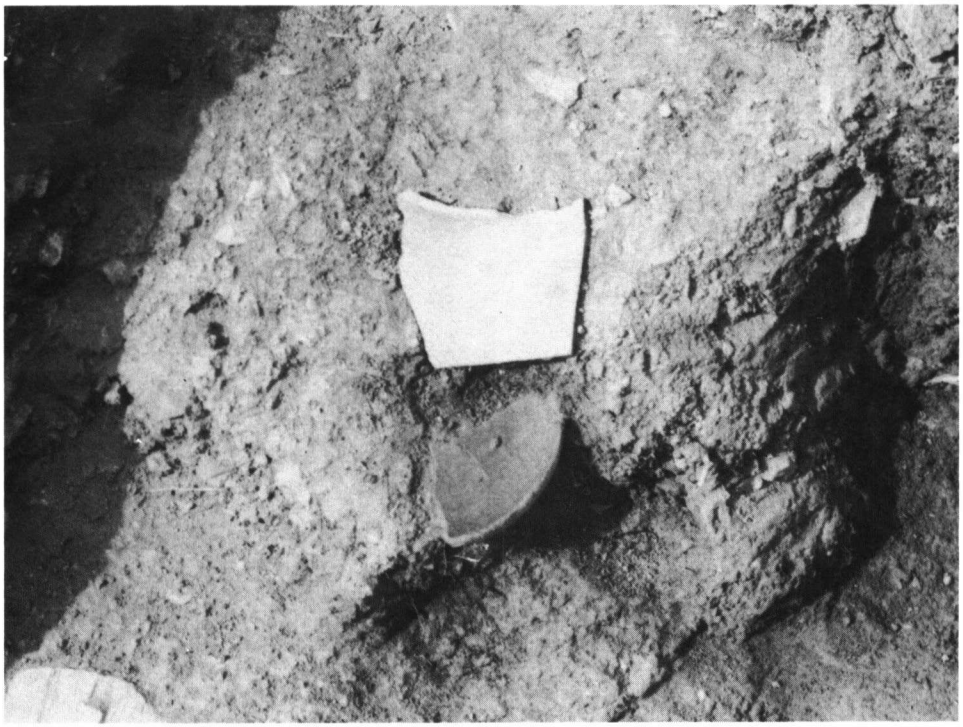
第１号窯跡須恵器出土状態



第１号窯跡須恵器出土状態

第１号窯跡須恵器出土状態　　北より

第１号窯跡須恵器出土状態　　東より



第１号窯跡灰原須恵器出土状態　　南より

第１号窯跡原原須恵器出土状態　　南より

**徳島市埋蔵文化財調査報告書**

**第　11　集**

内ノ御田須恵窯跡調査概報

— 1981年度 —

昭和 57 年 3 月 31 日

編　集　　徳島市教育委員会社会教育課

発　行　　徳島市教育委員会

印　刷　　グランド印刷